

Title	違憲審査制と民主主義：アメリカ憲法と違憲審査制を巡る論点（憲法研究：共同研究報告）
Author(s)	松田, 寿美子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4 : 22
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2666
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

(文責:松田寿美子 聖学院大学大学院アメリカ・
ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)
(2010年12月13日、聖学院本部新館 2 階)

【憲法研究】
違憲審査制と民主主義
—アメリカ憲法と違憲審査制を巡る論点—

2010年12月13日(月)、聖学院本部新館 2 階集会室において、本年度第 8 回憲法研究会が22名の参加の下に開催された。講演者は、一ツ橋大学法学大学院教授の阪口正二郎先生をお迎えして、上記の表題についての発表を頂いた。概要は以下の通りである。

はじめに、1) グローバルなレベルでの立憲主義の台頭と違憲審査制の流行、2) アメリカにおける違憲審査制に対する最大の懸念「反多数決主義という難題」、3) 制憲期との対称性「フェデラリスト第78篇」、4) なぜ「反多数主義」が懸念されるのか? 「反多数主義という難点」論の起源はどこか?、5) 他方で現在では違憲審査制は完全に定着している。なぜ定着しているのか? 以上の5点について述べられた。

次に、Lochner という問題について、1) Lochner 判決の「悪名」、2) 歴史の中のLochner、3) 違憲審査制に対する批判の台等、4) 大恐慌、ニューディール政策と連邦最高裁、5) ルーズヴェルト大統領の「コート・パッキング・プラン」とその挫折、6) West Coast Hotel CO.V Parrish (1973) による連邦最高裁の転換、7) United States V.Carolene Products Co. (1938) による新しい違憲審査の方向性、9) 最高裁にとっての教訓について発表された。

引き続き、ウォーレン・コートという問題、憲法学から学ぶいくつかの理論的応答、「反多数主義という難点」論にたいする最近の動向を提示された。

最後に、1) 日本の特殊な違憲審査制、2) 日本の特殊性を形成しているものは何か? についての2点を結びに代えられた。

質疑応答では、アメリカ最高裁の裁判官の終身制の論点を中心に活発な論議がなされた。